

5 ショート・バージョン

一単位時間を使ったクラス会議を重ねることで、子どもたちはかなりの問題解決能力を身につけることができます。

しかし、現在のカリキュラムでは、先生方が自由に使える時間がそれほどあるとは考えられません。もし学級活動で実施することを考えたら、小学校の場合なら年間三五時間が主に学級活動の時間として組み立てますが、その実際は行事の事前事後指導やその他で、問題解決の取り組みができるのは、せいぜい一五時間程度ではないでしょうか。よほど熱心な先生でも二〇時間がやっとでしょう。それくらいの時間数だと、「やらないよりマシ」のレベルかもしれません。

子どもたちが本当に問題解決能力をもち、他者支援にも当たり前に取り組めるようになるためには、ある程度の頻度が必要です。つまり、経験値を上げることが求められるのです。

週に一度プールに通う子と毎日通う子では泳力に差が出るように、やはり、問題解決能力をつけるにも、他者支援に取り組み力をつけるにも、ある程度の回数を経験することが力をつける条件です。

そこで、私はよほどの緊急の場合は朝の会や帰りの会の前後の学習時間の始まり一〇分程度を使ってショート・バージョンのクラス会議を実施していました。

一単位時間のクラス会議をロング・バージョンと呼ぶとすると、ちなみに、ある年の私のロングとショートの実施回数、は合計五〇回で、ロングが二〇回程度、ショートが三〇回程度でした。

ショートを繰り返すことで、子どもたちは経験値を上げ、スキルの高まりを見せました。しかし、一方でじっくり考えたり、伝えたい価値や態度を教えるには、やはりロングの時間が必要だと再確認しました。

ショートとロングを組み合わせることも、効果的に共同体感覚を伸ばすことができます。

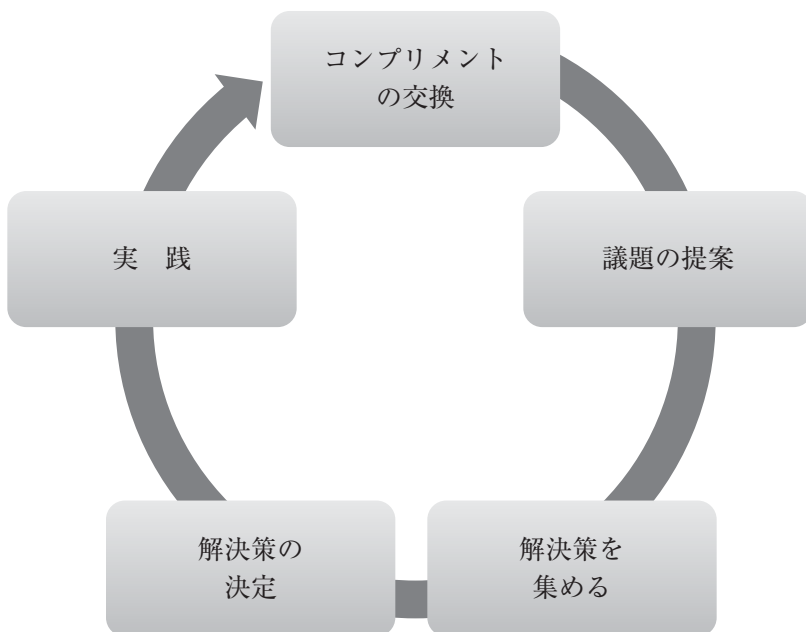


図3 クラス会議（ショート・バージョン）の流れ

まずショートを進め方です。ショートは、教師や子どもたちが必要を感じたらいつでも開催の提案をすることができま
す。手続きは簡単です。実施したいとい
う願いがあつて子どもたちが承認すれ
ば、即、実施です。

「○○さんが、急ぎでみんなからアイ
デアをもらいたいそうだけいいかな」

「クラス会議の議題がたまってきたよ
うです。短い時間で解決できそうな議題
を話し合ってもいいかな」

このような発議で始まることが多いで
す。実際の流れについては、図3をご覧
ください。座席は輪になつてもいいし、
そのまま机を教室の中央に向けてもいい
でしょう。時間のことを考えると、後者
でもいと思います。

コンプリメントの交換は、時間がなか



クラス会議（ショート・バージョン）の様子

つたら省略します。私は、あまりやっていませんでしたが、もちろんやっているクラスもあります。

次に議題の提案です。議題は、「個人の相談事」を扱うことが「多い」です。というのは、なかなか意見をじっくり検討する時間がないので、個人決定の話し合いに向いているからです。

「多い」というのは、急ぎで児童会などから話し合いを要請される議題も下りてくる場合があるので、必ずしも相談を扱うわけでもないからです。普段は、個人の相談が多くなります。

議題が提案されたら、解決策を集めます。クラス会議ロング・バージョンでは原則的に輪番ですが、時間があれば輪番で、なければ挙手でもいいと思います。出された意見はやはり板書します。ひととおり意見が出れば、提案者の選択となります。ふり返りの時間は特に設定していません。

「もし、何か問題があったら、また提案してね」

と言っておきます。また、次のロング・バージョンの時間に、

「○○さん、この前のショートで話し合った件、どう？ うまくいつている？」
などと確認するのもいいでしょう。

スキルの向上には、ある程度の「慣れ」が必要です。「何かあったら話し合う」ことを習慣化します。習慣化することで、行動コストが下がります。こうした習慣は、教科指導の時間にも転移し、当たり前前に話し合う学習が展開されるようになります。